

『壊れたガラス』における ユダヤ系アメリカ人のアイデンティティー

及 川 正 博

序論

アーサー・ミラーの主要な作品が家庭劇であり、そこには家庭における夫婦、父子、兄弟の対立・葛藤を通して社会問題を浮き彫りにする構図が見られるが、『壊れたガラス』でもこのパターンが踏襲され、中年夫婦の危機（葛藤）を通じてユダヤ系アメリカ人のアイデンティティーの問題が浮き彫りにされている。したがって、この作品は、中年に差ししかかった男女の夫婦関係（結婚）を縦糸に、そして彼らのユダヤ系アメリカ人としてのアイデンティティーの問題（民族）を横糸にして練り上げられた「家庭劇」と同時に「社会劇」でもある。ドイツ国内におけるユダヤ人迫害事件が、アメリカの中年ユダヤ人夫婦に投げかけた波紋を扱っているという意味では、「社会的政治事件」を下敷きにした「家庭悲劇」と呼ぶことも可能であろう。事実、ミラー自身、この作品を「悲劇」と呼んでいる¹⁾。いずれにしても、反ユダヤ主義の横行する異常な社会と危機に瀕した夫婦関係に焦点が向けられ、前作『最後のヤンキ』で展開された「壊れた夫婦関係」のテーマが継承されている。特に仕事一筋で人を見かけや職業とその人間関係でしか見ることができない夫フリックはゲルバーグと重なり、その俗物性について行けず密かに彼からいたわりの気持ちと精神的な充足を求めている妻カレンには、シルヴィアとの類似が明らかである。

ゲルバーグは、ワスプの一流会社で生き延びるために、差別の対象となるユダヤ人としてのアイデンティティーを捨てて会社人間になった。妻シルヴィアとは、仕事上で知り合い、彼女の経理に強い簿記係主任としての才能に魅了され結婚した。結婚に際して、ゲルバーグは、彼女に仕事を辞めさせた。こうして、シルヴィアは自分の望んだキャリア・ウーマンとしての道を断たれる。この彼女の悔恨の情は長男出産後、ゲルバーグとの夫婦関係拒否という結果をもたらす。ゲルバーグが性的不能に陥ったのは、彼女の彼に対する一種の復讐が原因であったと言える。と同時に、彼の反ユダヤ的態度が、ユダヤ人である彼女を心理的に苦しめたのだ。こ

のお互いの自己否定が、相手に悪影響を及ぼし偽りの結婚生活がだらだらと30年も続いた。このゲルバーグの反ユダヤ的態度が、彼女のトラウマとなってベルリンでのナチによるユダヤ人迫害事件を自分の状況と重ね合わせることで、シルヴィアはついに心理的に追い詰められる。ゲルバーグが彼女の夢の中でナチの姿で現れるのは、そのためである。身体的にも不調をきたし、その結果、両脚が麻痺となり歩行困難に陥る。このストーリーからもわかるように、『壊れたガラス』は、基本的にアメリカのユダヤ人夫婦の夫婦関係が主題である。夫の反ユダヤ的アイデンティティーと妻のユダヤ人迫害の新聞報道による両脚麻痺を取り上げていることから、ミラーはユダヤ問題もテーマとしていることがわかる。この作品が結婚問題を縦系に、民族問題を横系にしているというのは、そういう意味である。

これまでミラーがユダヤ人問題を直接に扱った作品には、『焦点』*Focus* (1945)、『ヴィッシーでの出来事』*Incident at Vichy* (1964)、『時を奏でて』*Playing for Time* (1980) があり、間接的には『転落の後に』*After the Fall* (1964) がある。アメリカのユダヤ系劇作家である彼にとって、この問題が彼の好むと好まざるとにかかわらず、身近なものとして存在しているのは、疑いのない事実である。ただ、彼はこの問題を自己の感情に任せて、いたずらに社会悪の暴露や告発に走ることはせず、その本質を冷静に見極める姿勢を取っている。この態度はユダヤのテーマに限らず彼の創作活動全般に一貫して見られるもので、その基底には人間存在の意味と平和的人類共存の追求という大前提がある。『ヴィッシーでの出来事』と『時を奏でて』は、ホロコーストを主に扱っているが、『焦点』ではアメリカの反ユダヤ主義を扱っている。『壊れたガラス』もシルヴィアを通してホロコーストの恐怖が描かれるが、『焦点』との類似性の方が強い。

『焦点』は、ミラー唯一の長編小説だが、反ユダヤ主義自体が主題ではなく、それはあくまでもこの小説の題材に過ぎない。主題はむしろ、その裏に隠された「不安」、「恐怖」、「憎悪」、「暴力」である²⁾。一般的に言って、「不安」と「恐怖」は、反ユダヤ主義の犠牲者であるユダヤ人が蒙る心理的状态であり、「憎悪」と「暴力」は反ユダヤ主義者がユダヤ人に向ける偏見に基づく感情と行動である。この小説では、たまたま眼鏡をかけたことで、ユダヤ人に間違えられることになった非ユダヤ人であるニューマンが、ユダヤ人として迫害を受ける体験を通してユダヤ人の痛みを我が身に受け止め、ユダヤ人として生きて行く姿が描かれる。ユダヤ人でないニューマンがユダヤ人とみなされることは、本来の彼以外の存在にさせられることを意味する。その不安と恐怖から逃れ、反ユダヤ主義の憎悪と暴力に身を任せるならば、彼は一層救いがたい自己以外の存在となり、自己喪失に苦しむことになる。これを理解したニューマンは、彼自身がユダヤ人として見間違われることを敢えて拒否せず、自己の社会的責任を果たす決意をする。その姿勢にミラーは、人間存在の理由と意義を求めているように思われる。こうした彼の思いが、主人公の名をNewmanと命名した所以であろう。

『壊れたガラス』では、同じアメリカの反ユダヤ主義を取り上げているが、主人公はニューマンと違ってユダヤ人でありながら、逆に社会上の立身出世と自己保身のため敢えて、反ユダヤ主義的態度を取る。『焦点』に見られる「不安」、「恐怖」、「憎悪」、「暴力」などの要素も作品のそこそこに見られる。妻シルヴィアは夫ゲルバーグの反ユダヤ的態度に不安と恐怖を感じるが、それと同時にゲルバーグの憎悪と暴力の対象にもなっている。ミラーがユダヤ問題をユダヤ人同士の関係、それも夫婦関係を中心に描いたのは『壊れたガラス』が初めてである。これはユダヤ問題が、ひとりユダヤ人对非ユダヤ人との問題ではなく、ユダヤ人自身の問題でもあるとする彼の考え方を如実に示している。

政治的事件と個人的要素が入り混じったやや複雑な場面設定のため、上記の二つのテーマ、すなわち中年夫婦の結婚問題とユダヤ人のアイデンティティー問題が作品の中でどのように関連しあっているのか、一つわかりにくい。この関連性をここで、解き明かしておきたい。そもそも、ゲルバーグ夫婦の結婚破綻の大きな原因は、すでに触れたそれぞれの自己否定にある。ゲルバーグはユダヤ人でありながら、仕事上でのし上がるためにユダヤ人としてのアイデンティティーを否定した。シルヴィアは製鉄会社の優秀な簿記係の主任であり、仕事を続けたかったにもかかわらず、ゲルバーグと結婚したために、いわゆるキャリア・ウーマンの道を断たれてしまう。こうして、ゲルバーグと違って間接的ではあるが、自己否定が彼女の心の中に悔恨の念として残る。このお互いの自己否定が、相手に悪影響を及ぼし偽りの結婚生活がだらだらと30年も続いたが、ドイツのユダヤ人迫害事件の新聞報道がもとで生じたシルヴィアの両脚麻痺が契機となって、それぞれが結婚破綻の原因を突き止め、その責任を我が身に引き受けることになる。両者を自己責任の覚醒に導く調停役がハイマンである。

ハイマンはシルヴィアが麻痺にかかったのは、夫婦関係に原因があると見る。夫婦と面談するたびに二人にその関係を訊きだすのは、そのためである。ゲルバーグはその関係が全くないにもかかわらず、嘘をついたことを皮切りに、社長の誤解による首の宣告とその結果としての心臓発作を通じて、彼は自己のユダヤ人としてのアイデンティティー否定が、シルヴィアを悩まし、彼女との結婚破綻の原因となり、自分に跳ね返ってきたことを自覚する。他方、シルヴィアもハイマンの男性的な魅力に惹きつけられ一時、うつつを抜かしはするものの、偏狭な「ユダヤ女」としてのこれまでの自分の生き方を反省する機会を得る。ゲルバーグとの結婚生活の破綻に関しても、自分に責任の一端があることを悟る。結婚生活において自分を投げていたとゲルバーグに認め、彼同様、自己責任を認識する。こうして、お互いに責任をなすり付け合って解決に積極的な行動を取らなかった愚を認め合う。したがって、『壊れたガラス』はハイマンを通してユダヤ系アメリカ人夫婦が、互いの自己否定という結婚生活の原因を突き止め、自己責任と自己覚醒を遂げる様を描いた作品と言える。ミラーはシルヴィアの両脚麻痺を通してユダヤ系アメリカ人の夫婦問題とナチのユダヤ人迫害、さらに、それと関連したアメリカの

反ユダヤ主義を提示し、それぞれが問題の核心から目をそらすことは、何の解決策も生み出さず、むしろそれは問題の先延ばしと相手の行動の是認を意味することになると警告を発していると言えるだろう。これは、他者意識と受動的態度を排し、連帯性と自己責任の重要性を重視するミラーのメッセージに他ならない。

この作品は1938年11月のニュー・ヨーク市ブルックリンのユダヤ人居住地区が舞台である。ユダヤ人の青年がドイツの領事館員を殺害したことが発端となって起こった1938年11月9日のナチ突撃隊などの暴徒によるユダヤ人街焼き討ち事件、いわゆる「クリスタルナハト」(「水晶の夜事件」)が起こった数日後のことである。痛ましい水晶の夜のイメージを増幅するためにチェロの音楽が導入され、効果を發揮している。この事件と妻の病気との因果関係が予想される中、真相を知るべく夫のフィリップ・ゲルバーグが、医師のハリー・ハイマンの病院を訪問するところからこの芝居は始まるが、事態はゲルバーグの予想に反して意外な展開を辿る。妻の病気の様子を訊きにきたはずのゲルバーグは、ハイマンから彼自身の個人的な事柄を逆に尋ねられる。ハイマン特有の直観に基づく一連の質問を通して、ゲルバーグの独善的な考え方と自己欺瞞の態度が徐々に明らかにされる。と同時に女性として、また妻として、シルヴィアが抱える問題の数々も露呈し、夫婦の危機的状況の本質が白日の下にさらされる。さらに、ハイマン自身の個人的な問題点も彼らとの関わりの中で、浮き彫りにされていく。

「壊れたガラス」というこの戯曲のタイトルの意味に関して、リチャーズは次のように説明する。

Mr. Miller's title is double-barreled. On one hand, it refers to Kristallnacht, that night in 1938 when Nazis went on a rampage, shattering windows of Jewish shopkeepers and burning synagogues. It also has a domestic connotation, suggesting a violent fight between spouses and the wreckage of dinnerware flung in fury. Operating on the premise that no marriage is an island, Mr. Miller wants to connect the Gellburg's traumas directly to the hysteria sweeping over Germany. ³⁾

これは文字通りナチによるユダヤ人街の焼き討ち事件で壊された商店やシナゴグなどの粉々に飛び散った窓ガラスの破片を象徴している。次に、ユダヤ人の伝統的な結婚式では、新郎が式後、皿やコップを床に落として将来出くわすかもしれない艱難辛苦にも打ち勝つ宣誓を象徴している。さらに、この作品との関連では、本来のユダヤ人としてのアイデンティティーを否定したために鏡の中に自分の姿をはっきりと捉えることのできないゲルバーグの壊れた内面の鏡をも象徴する。と同時に「ユダヤ女」を演じ他人に気を遣い過ぎて自己喪失に陥り、拳句の果てにナチのユダヤ人迫害事件とそれに対する周りの人々の無関心によって壊されたシルヴィア

『壊れたガラス』におけるユダヤ系アメリカ人のアイデンティティー（及川）

の外面の鏡をも象徴していると考えられるだろう⁴⁾。いずれにしても、当時のアメリカの反ユダヤ主義がこの二人に与えた影響を反映したタイトルであることに変わりはない。さらに、シルヴィアの両脚麻痺に関して、リチャーズは“Sylvia’s paralysis, we’re meant to understand, stems from the failure of those around her to recognize the Nazi threat. Her husband’s self-loathing is deadening her. Literally.”⁵⁾と述べて、ナチの脅威への周りの人間の認識不足と夫のユダヤ人としての自己嫌悪が原因と説明する。これらは、この作品を理解する上で、参考となる基本的知識として認識しておく必要がある。

さて、ヘンリーはシルヴィアの麻痺に関して四つの問題提起を行っている。“Is it a result of her sexless and bitter marriage? Is it linked to the futile assimilationism of her Jew-among-Wasps banker husband? Is it somehow tied to her Cassandra-like obsession with Hitler’s assault on German Jews, a threat in which no one around her sees urgency? Or is her disability a plea for attention?”⁶⁾ 本稿では基本的にこれらの疑問に答えることを前提に論を展開していくが、特にスターンズも指摘する次の二点、すなわち彼女の麻痺とナチ・ドイツの反ユダヤ主義に対する彼女の凶事の預言者としてのカサンドラの洞察力との関連性と、またその麻痺が夫のユダヤ人としてのアイデンティティー拒否とどう関係するのか⁷⁾に絞って考察を進める。要するに、『壊れたガラス』において、ヨーロッパで起こったナチによる反ユダヤ主義がアメリカのユダヤ系女性とその夫に少なからぬ影響を及ぼし、それが夫婦の隠された秘密を暴く切っ掛けとなった経緯を詳しく検証し、そこから見えてくるユダヤ系アメリカ人のアイデンティティーの問題を探り、ミラーのこの作品に込めた意図を読み解く。

1. ワスパ社会に翻弄される夫ゲルバーグの反ユダヤ性

ビッグズは、ゲルバーグ夫妻の民族および結婚観の隔たりに関して、次のように述べている。

Phillip and Sylvia Gellburg are joined by race and marriage, yet divided by both. He seeks to suppress his Jewishness, she to embrace it. He is sexually dysfunctional, she sexually unsatisfied. What Hyman diagnoses as her “hysterical paralysis,” with its source in her unconscious, is an effect of both these divisions. The playwright loses no time in setting up her husband’s double denial.⁸⁾

ビッグズが指摘するように、破綻した結婚の原因が20年間もなかったと言う夫婦関係(marriage)にあることは否定できないが、まず、その根底にあるゲルバーグのユダヤ性(race)

を巡るあいまいな態度が問題にされなければならない。結論を先に述べるならば、ゲルバークはワスプ社会での立身出世しか頭になく、ワスプの反ユダヤ主義を恐れるあまり、その支障となる彼自身のユダヤ系アメリカ人としてのアイデンティティーを嫌って自己否定を図り、結果的に自己欺瞞、自己矛盾、自己嫌悪に陥り、果ては自己疎外に苦しんだ男である、と言えるだろう。彼のユダヤ人としてのアイデンティティー拒否は、幕開き早々、ハイマンの診察室で妻のマーガレットが彼の名前を典型的なユダヤ名のゴールドバーグと間違っただのを懸命に否定するところによく表れている。この彼のユダヤを巡る自己否定は、本人が認識しないほど反ユダヤ性を帯び妻シルヴィアを苦しめ彼女との結婚生活を失敗させた大きな原因である。シルヴィアの謎の両脚麻痺は、ベルリンのユダヤ人迫害事件を契機として噴出したゲルバークとの冷え切った長年の結婚生活への「ユダヤ女」の忍従と不満が限界に達した表れだったのである。

要するに、彼女の両脚の麻痺は、写真入りのユダヤ人迫害事件のショッキングな新聞報道に対する彼女の過度な反応に原因があった。だが、それは間接的なもので、直接の原因は彼女を長年悩まし続けたゲルバークの彼女に対するユダヤ人の夫としての反ユダヤ的態度、すなわち同胞ユダヤ人への裏切りの態度にあった。事件はこれに拍車をかけたに過ぎない、ということである。そして、この反ユダヤ的態度から生じるゲルバーク自身の自己欺瞞や自己矛盾は徐々にハイマンの手によって暴かれて行く。その糸口は、ハイマンのゲルバークに対する妻との個人的な夫婦関係に関する質問である。彼は先にシルヴィアを診断した際に得た感触から、二人の間には夫婦関係を巡る問題が潜んでいることを察知したのであった。以下、ゲルバークの反ユダヤ的自己否定の正体とそれがシルヴィアに与えた影響の要因（不安、恐怖、憎悪、暴力）を彼のハイマンとシルヴィアとの会話から考察する。

第1幕第1場の幕開きから、ゲルバークとシルヴィアの夫婦関係を中心に彼自身の「クリスタルナハト」事件や仕事に対する考え方が、ハイマンの一連の質問によって明らかにされ、そこから彼の歪んだユダヤ人としてのアイデンティティーが徐々に暴露される。まず、シルヴィアの両脚麻痺の直接的原因と考えられたユダヤ人街暴動事件に関して、ゲルバークは “The thing is, she doesn't like to hear about the other side of it. ... It's no excuse for what's happening over there, but German Jews can be pretty ... you know ... *Pushes up his nose with his forefinger.* Not that they're pushy like the ones from Poland or Russia but a friend of mine's in the garment industry; these German Jews won't take an ordinary good job, you know; it's got to be pretty high up in the firm or they're insulted. And they can't even speak English.”⁹⁾ と言って、自分自身がユダヤ人でありながら、ドイツ系ユダヤ人への彼の嫌悪感と無関心ぶり示す。また、事件の写真付き報道に関しても “Personally I don't think they should be publishing those kind of pictures. ... She scares herself to death with them -

three thousand miles away, and what does it accomplish! Except maybe put some fancy new ideas into these anti-Semites walking around New York here.”(19-20) と述べて、他人行儀的態度を示す。こうした態度こそ、シルヴィアが最も嫌うのは言うまでもない。

新聞報道もさることながら、ハイマンはシルヴィアの病気の原因が、彼との夫婦関係にあると判断し、さらにその背後にある問題の核心を徐々に突いて行く¹⁰⁾。この極めてプライベートな事柄を訊き出すに当たって、彼はシルヴィアの件では、これから「トカス・オッフン・ティシュ」で行こうとイディッシュ語でゲルバークに語りかけ、その意味がわかるかどうか尋ねると、ゲルバークは即座に「洗いざらいぶちまける」と答える。ここからも判るように、彼のユダヤ人としてのアイデンティティーは隠しようがない。

ゲルバークが身を包むビジネスマンのトレード・マークとも言える黒いスーツ、黒ネクタイ、黒靴に白のワイシャツは、彼の家庭を顧みず仕事一筋の会社人間と自分の嫌うユダヤ人のイメージそのもので、ここには彼の自己矛盾ぶりがはっきりと表れているだろう。黒づくめの衣装に加え、顔色が冴えないのは、彼の暗い内面の世界を象徴している。それは、すなわち、彼が自身の人生を嘆き悲しんでいるかのようでもある。オッテンは、そこにゲルバークの“self-death”が反映されていると見ている¹¹⁾。心の奥底では、空虚感に襲われ、どうしようもない自己矛盾に苛まれているのだ。また、ゲルバークは、社長はじめワズプで占めるブルックリン保証信託に勤め、アメリカズ・カップで優勝した社長スタントン・ケイス¹²⁾の所有するヨットのデッキに立ったユダヤ人は自分だけだと誇り、会社始まって以来、ユダヤ人の社員は自分だけだと豪語する。ここには、すっかりワズプ社会に迎合した彼の姿が垣間見られる。

シルヴィアは両脚が麻痺した割には、話していてちっとも不幸せには見えないと言うハイマンに対して、ゲルバークは彼女が悪霊（Dybbuk）に取りつかれているので、ラビにお祓いをしてもらいそれを追い払う必要があるかもしれないと、古いユダヤ民族伝説を口にする。ここにも蔽うことの出来ない彼の伝統的なユダヤ人としてのアイデンティティーの一面が見え隠れして、彼の矛盾ぶりが示されている。医院でハイマンを待つ間のマーガレットとの会話で、彼女が彼の名前を典型的なユダヤ姓のゴールドバークと言い間違えると、むきになって訂正したことからもわかるように、公的にゲルバークはユダヤ人としての自己のアイデンティティーを断固、否定する。他方、上記のように、それに対して肯定的な一面をも覗かせ、自己のユダヤ人としてのアイデンティティーについて彼がいかに矛盾したアンヴィヴァレントな考え方の持ち主であるかがわかる。ハイマンとの面会を終えて医院を出て行った際に、ハイマンの妻マーガレットがゲルバークに関して“*That's one miserable little pissar. He's a dictator, you know.*” (26) と言い、ばあさんの葬式で参列者に示した彼の高圧的な態度に言及する。ここからは、シルヴィアに見せてきた彼の頑固で独り善がりなユダヤの家父長的イメージが見て取れるだろう。

ユダヤ人として自己否定をしながらも否定し切れない彼のアンヴィヴァレントな姿勢は、第2場での彼の息子の自慢話にも見られる。マッカーサー将軍から二度声を掛けられたと書いてきた陸軍士官学校出の一人息子ジェロームからの手紙をゲルバーグはシルヴィアに見せて“For a Jewish boy, West Point is an honor! Without Mr. Case's connections, he never would have gotten in. He could be the first Jewish general in the United States Army. Doesn't it mean something to be his mother?”(37)と叱責する有様である。メイヤーは、この彼の過剰なユダヤの自己自慢を“a mask that hides the fear that he is a “candidate for victimization””(13)とみなしている。第3場では、ハイマンはシルヴィアの妹、ハリエットからゲルバーグに関して個人情報を得ている。彼女によると、彼は気分屋で、他人の意見に耳を貸さない頑固な共和党员で、変にユダヤ人にこだわるどころがあり、皆から嫌われているという。ユダヤ人として他のユダヤ人からも疎まれていたゲルバーグの自己疎外の姿が、ここに見られるだろう。また、ゲルバーグの意外な一面が彼女の口から二つ暴露される。両方とも彼のシルヴィアに対する暴力的な側面である。一つ目は、シルヴィアの料理したステーキが不満で、それで彼女の顔をひっぱたき、母親がとりなさなかったら、どうなっていたか分からないというものである。夫婦関係を含む日頃のストレスが爆発し、暴力に及んだゲルバーグの姿を見る思いがする。

同じ第3場でハリエットが語る二つ目の話は、彼の致命的側面であるインポテンツと関連するものである。今は亡きおじのマイロンは、毎年元旦に地下室で新年のパーティーを開き、その時決まってかねてから靴箱に集めておいたボルノ写真を取り出して回し見させて、皆が笑い転げるといふ。シルヴィアが笑っている最中にその手から絵葉書をひったくり、わめいて彼女を階段のところへ投げ飛ばし、手すりも折れた。そして、その怒りの原因は「自分が出来ないからだ」といふ。こうして見ると、ゲルバーグはかなりの性的コンプレックスに苛まれているのがわかる。このコンプレックスは、もとを正せば、ひとえにユダヤ人としての彼自身の不安定なアイデンティティーに原因があるだろう。これに加えて、彼の反ユダヤ的態度が原因で起こる「暴力」的側面も見落としてはならない。第2幕第1場はケイスのオフィスである。ケイスが投資しようと目を付けていた物件611を近くの大手デパートのワナメイカーが撤退する噂があると進言して思いとどまらせたことが裏目に出て、そのことでゲルバーグがケイスに詫言に來ているところである。競争会社のユダヤ人カーショウィツと通じていたのではと疑われ、その関係を断固、否定する。この自己弁護には、カーショウィツを裏切る痛々しいほどの彼のユダヤ人としての自己否定意識とワスプ社会に媚びる姿が表れているだろう。

第2場でシルヴィアは、ハイマンに、この病状は心の奥深いところから來ているので夢にまで立ち入らなければならないといわれ、彼女が毎晩見るといふゲルバーグに関する悪夢の話語る。“I'm in a street. Everything is sort of gray. And there's a crowd of people. They're

packed in all around, but they're looking for me. ... Well, I begin to run away. And the whole crowd is chasing after me. They have heavy shoes that pound on the pavement. Then just as I'm escaping around a corner a man catches me and pushes me down. ... He gets on top of me, and begins kissing me. ... And then he starts to cut off my breasts. And he raises himself up, and for a second I see the side of his face. ... I think it's Phillip. ... Would it be possible ... because Phillip ... I mean ... he sounds sometimes like he doesn't like Jews? ... Of course he doesn't *mean* it, but maybe in my mind it's like he's ... (97 - 98)

先に見たゲルバークの彼女に対する暴君的態度が、彼女の心の奥底に無意識に定着し、こうした悪夢となって表れている。オッテンは、これについて “Tyrannizing Sylvia because of his self-detestation and self-defensiveness, he surfaces in her recurring nightmare in the guise of a Nazi who starts to cut off her breasts.”¹⁴⁾ と述べて、ホロコーストの恐怖とゲルバークの暴力的反ユダヤ的態度が彼女の心の中で重なり合い一つとなって、恐怖心を抱かせていると指摘する。

ハイマンが去った後の第2場後半は、ゲルバークとシルヴィアの力関係が逆転する注目すべき場面である。ありもしない昨夜の関係についてハイマンに語ったゲルバークの嘘がシルヴィアの知るところとなり、彼のユダヤ人男性としての面目が潰れるからである。こうしてゲルバークの欺瞞性が暴露され、彼の化けの皮が剥がされる。だが、これが契機となって、二人のこれまで途切れていた真のコミュニケーションが再開し、彼らは過去の真実に向き合うことになる。ゲルバークはシルヴィアが仕事を続けたかったにもかかわらず、彼女を家に縛りつけ、彼女はそれによってキャリア・ウーマンの道を断たれ、彼女の自己否定が決定づけられた。ユダヤ人であるにもかかわらず、そのアイデンティティーを否定して家庭を顧みず、ワズプ社会であくせく働くゲルバークにシルヴィアは反感を募らせていったのである。

第3場では、自己のユダヤ人としてのアイデンティティーをないがしろにし、あまりにもワズプ社会に迎合したつけがゲルバークに回ってくる。自分の間違った進言がもとで、社長が求めた物件をみすみすライバル会社に取りられ信用を失った結果、首を恐れたゲルバークは第1場と同様、申し開きをするために社長に会いに来る。しかし、冷たくあしらわれて、“Mr. Case, I had nothing to do with Allan Kershowitz! I hardly know the man! And the little I do know I don't even like him, I'd certainly never get into a deal with him, for God's sake! This is ... this whole thing is ... I don't understand it, what is happening, what the hell is happening, what have I got to do with Allan Kershowitz, just because he's also a Jew?” (118)と大声を上げる。自分はカーショウィツのような悪いユダヤ人とは違って、良いユダヤ人であると言いたいのであろう。しかし、ケイスがゲルバークに浴びせる「君らの連中」や「少数の君ら」という言葉が示すように、彼にとってゲルバークはその他大勢のユダヤ人の一人に

過ぎないのである。ゲルバーグは出て行こうと一歩踏み出すとがっくり膝をつき、心臓発作に襲われる。第4場は、ゲルバーグが退院して彼の家に集まったハリエットとマーガレット、それにシルヴィアが加わってゲルバーグについて語っているところである。なかでも注目すべきは、シルヴィアからゲルバーグに関する本音が漏らされていることである。“The trouble, you see - was that Phillip always thought he was supposed to be the Rock of Gibraltar. Like nothing could ever bother him. Supposedly. But I knew a couple of months after we got married that he ... he was making it all up.” (122) 虚勢を張って仲間から一定の距離を置き、ひたすら自分を非ユダヤ人として位置付け、ワズプ社会で気を遣いながら戦々恐々と「虚勢を張って」生きてきた痛々しいゲルバーグの姿が、改めて見て取れる。

最終場面の第5場で、ゲルバーグは診察にきたハイマンに現在の胸のうちを次のように語る。“...when I collapsed ... it was like an explosion went off in my head, like a tremendous white light. It sounds funny but I felt a ... happiness ... that funny? Like I suddenly had something to tell her that would change everything, and we would go back to how it was when we started out together. I couldn't wait to tell it to her ... and now I can't remember what it was. *Anguished, a rushed quality; suddenly near tears.* God, I always thought there'd be time to get to the bottom of myself!” (125) ここには、自己のユダヤ人としてのアイデンティティーを否定して長年、信頼して勤め上げてきたはずの会社社長に「裏切られた」とする思いがある反面、裏切られたことでかえって本来の自分に戻れる可能性が見出せる「幸せ」を感じたゲルバーグの複雑な心中が吐露されているだろう。この病気は、あまりにも重い代償である。ゲルバーグのケイスへの恨みは、彼がいわばシルヴィアとの家庭生活を犠牲にするほど会社に一途であったがために、根深いものがある。戻れば、社長ともうまくいくさとなだめるハイマンに、彼は自分があくせく、きつい仕事をこなしている間にヨット遊びに興じ、ライバル会社のユダヤ人と共謀して自社に不都合をもたらしたと言いがかりをつけ、即座に首にしたと言う。ケイスの存在は、偏見に満ちた根拠のない疑いとあからさまな人種差別に基づく反ユダヤ主義が横行した30年代アメリカの好ましからぬ一面を象徴しているだろう。

会社に裏切られはしたが、一方ではこれで彼の重荷の一つが取れ、シルヴィアとの関係を冷静にしかも真剣に考える機会をゲルバーグは得る。自分はシルヴィアを尊敬すらしているのに、彼女が自分を怖れていることをハイマンから知ったゲルバーグは、今ひとつわからないその理由を探り始める。“How could she be frightened of me! I worship her! *Quickly controlling.* How could everything turn out to be the opposite - I made my son in this bed and now I'm dying in it ... *Breaking off, downing a cry.* My thoughts keep flying around - everything from years ago keeps coming back like it was last week.” (127) 彼はまた、“I don't know where I am ... (128)” と言う。自分のよって立つ居場所がわからないというこの言葉は、ゲルバ

ーグが自己の属すべきユダヤ社会との繋がりを断ち、ユダヤ人としてのアイデンティティーを否定したがために自分が誰であるかわからなくなったことを如実に示している。こうして、会社に裏切られたことでゲルバーグはシルヴィアとの幸せな新婚時代を回想し、今まで避けて通ってきたユダヤ人としての自己のアイデンティティーを真剣に考え始める。ビッグスは、ここにユダヤ人コミュニティとの連帯が結局、ゲルバーグに心の安らぎを与えたとして、ミラー劇の重要なライトモチーフである“connectedness”「連帯性」を指摘する¹⁵⁾。

この後、ゲルバーグは同じユダヤ人のハイマンに思わず“Why is it so hard to be a Jew? ... Being a Jew is a full-time job.” (129) と述べて、ユダヤ人としての生き方の極意を問う。これこそがこれまでのゲルバーグの生活を支配してきた偽りのないトラウマであった。ハイマンに、自分はユダヤ人ということに、ゲルバーグほどとり憑かれてはいないし、また、ユダヤ人でない振りをしたことも一度もないと言われ、これまでの自分の取ってきた態度の間違いに気が付き、思わず“I’ve never been so afraid in my life.” (130) と打ち明ける。その心中を読んで、ハイマンは“I think you tried to disappear into the goyim.” (130) と述べて、ゲルバーグのユダヤ人としてのこれまでの人生態度の間違いを適切に指摘する。また、ハイマンはシルヴィアが自分を怖がる理由を知りたがるゲルバーグに、“You hate yourself, that’s what’s scaring her to death. That’s my opinion. How it’s possible I don’t know, but I think you helped paralyzed her with this “Jew, Jew, Jew” coming out of your mouth ... (133) と述べて、彼のユダヤ人に対する普段の言動が原因であると指摘する。そして、本当のことを知りたいのであれば、鏡を見ることだと続ける。

しかし、ゲルバーグの言い訳とも取れる以下の台詞には、反ユダヤ主義に抗するための防御として築いてきた彼の心中に未だ渦巻く自己のユダヤ人としてのアイデンティティー否定という考えの根深さを窺い知ることができる。“But there are some days I feel like going and sitting in the schul with the old men and pulling the *talles* over my head and be a full-time Jew the rest of my life. With the sidelocks and the black hat, and settle it once and for all. And other times ... yes, I could almost kill them. They infuriate me. I am ashamed of them and that I look like them. ... Why must we be different? Why is it? What is it for?” (133) この違いを認めず、凝り固まった融通の利かない思考回路しか持ち得ないゲルバーグに、ハイマンはこの世の中には色々な人種がいて、それぞれが迫害し合っている事実を理解すれば、他人はおろか自分も許すことが可能となり、異教徒とも仲良くできる道が開けると説く。ハイマンの言うゲルバーグの中にある「痛みや叫び」は、差別されている者の痛みと叫びに他ならない。これを超越せよというのが、ハイマンのアドバイスである。同じユダヤ人であるハイマンの忠告だからこそ、説得力があるだろう。以後、ゲルバーグの心の変化に及ぼしたその影響は、甚大である。

第5場の後半は、大団円にふさわしくゲルバークとシルヴィアの和解の様子が描かれる。自己の見せ掛けの人生を悟ったゲルバークの次の台詞は、それを何よりも物語っている。“I wasn't telling you the truth. I always tried to seem otherwise, but I've been more afraid than I looked. ... Everything. Of Germany. Mr. Case. Of what could happen to us here. I think I was more afraid than you are, a hundred times more! And meantime there are Chinese Jews, for God's sake. ... *They're Chinese!* - and here I spend a lifetime looking in the mirror at my face! - Why we're different I will never understand but to live so afraid, I don't want that anymore, I tell you, if I live I have to try to change myself. - Sylvia, my darling Sylvia, I'm asking you not to blame me anymore. I feel I did this to you!” (137) ゲルバークは、中国人のユダヤ人もいることをハイマンに知らされ、これまで苦しんできた自己のユダヤ性から開放される。ユダヤ人というアイデンティティーを隠すことなく、鏡の中の自分を見つめて、あるがままに生きることの重要性を認識した彼の姿がここに見られる。この直後、ゲルバークの呼吸が苦しくなり始め、シルヴィアに許しを請いながら意識を失い、仰向けに倒れる。かくして、ゲルバークの自己覚醒への旅は、終わりを遂げるのである。

ハイマンは、ゲルバークがユダヤ人としての「自分自身を嫌っている」と見た。だが、彼の問題は、そう単純なものではない。というのも、自分ないしは自分の息子が最初あるいは唯一のユダヤ人として大きな業績を挙げることに誇りを感じており、その意味で単純に彼がユダヤ人として自己嫌悪に陥っているとは断言できないからである。ただし、アボットソンも指摘するように、彼が自己の業績や息子の出世を誇る理由が、ユダヤ人としてなのか、それとも自己のユダヤ人性にもかかわらずということなのかが、問われなければならない¹⁶⁾。結局、どちらにしても彼には意味のあることなのだ。それは、彼が紛れもないユダヤ人だからである。ゲルバークは、アメリカにおける反ユダヤ主義への恐怖と自身のワスプ社会でのキャリア向上ゆえにユダヤ社会との関係を断ち切るのだが、無論、自己のユダヤ性から逃げ切れるものではない。ユダヤ人の妻を持ち、イデッシュ語を喋り、ユダヤ的伝統に縛られているのは、明らかであるからだ。しかし、あまりにも自己の利益や考えに囚われているがために、彼はユダヤ社会に居場所を見出すことができない。自己のユダヤ性と正面から向き合わない限り、たとえ表面的にユダヤ社会に受け入れられたとしても、所詮、反ユダヤ主義がはびこる当時のアメリカ社会において、彼は疑いもなく居心地の悪さを感じ嫌悪感さえ募らせるのは、明白である。首になって初めて知ったワスプ社会の冷酷さと妻シルヴィアとの真の理解を欠いた不幸な結婚生活が、何よりもそれを象徴的に物語っているのである。

翻って考えてみると、ゲルバークは、自己の感情をシルヴィアに伝える能力と術を欠き、妻を愛してはいるものの、それをすなおに口で言い表すことができなかった。全幅の信頼を寄せた会社の社長から首を言い渡された後の大団円での彼の心臓発作が一大転機となり、ゲルバー

グは自己のこれまでの人生を振り返り、シルヴィアと彼の属すべきユダヤ社会との関係を修復することを望み、最終的に自分が変わらねばならぬことをハイマンを通じて悟る。そして、彼はついに良き夫、良きユダヤ人になる決意を固めるのだが、それはすでに時期遅きに失したのである。ゲルバーグの反ユダヤ的態度は、ユダヤ人としての自身のアイデンティティーを覆い隠せるものではない。本来のユダヤ的態度が意識的にしろ、無意識的にしろ、顔を出すのは当然である。こうして、自己否定は自己矛盾、自己欺瞞を引き起こし最悪の場合は自己嫌悪に陥り、さらに、周りからは疎外される。かくして、不安、恐怖に絶えず襲われ、そのフラストレーションから自分の思うようにならない相手を憎み暴力を振るうことになる。彼の内面世界をアボットソンは、次のように分析する。

Gellburg offers up glimpses of inner torment in his outbursts of anger and hesitancy. His pent-up anger conveys an increasing sense of threat. ... Internally, Gellburg is a mass of contradictions he finds hard to control. He has lost the ability to connect and communicate his true feelings to Sylvia. We are constantly told he loves and adores his wife, and the difficulty he has admitting this to Sylvia is related to his fear of such uncontrollable feelings.¹⁷⁾

これがゲルバーグの内的世界の正体である。

彼は当時のアメリカの反ユダヤ主義に敏感であると共に、自分の民族への愛情も備え持っている。彼は、結局、ヤフェの言うアメリカのユダヤ人史に流れるパラドックスの変形である自己矛盾、分裂した人格の持ち主であると言えよう¹⁸⁾。これが原因で、ゲルバーグは自分でもコントロールできない大きな矛盾を抱え込むことになった。シルヴィアを愛し、崇拜しているにもかかわらず、それを面と向かって言い出せないのは、この彼の自己抑制できない感情“uncontrollable feelings”¹⁹⁾と関係がある。オッテンは、彼のこうした分裂した人格が周囲にもたらした結果を次のように述べる。

Seeing his Jewishness as a source of guilt and shame, he acquires innocence by trying not to be a Jew and consequently victimizes others around him. To conceal his divided nature even from himself, he not only allows himself to be co-opted by the dominant WASP system that rejects him as Jew, but he warps his son's future and betrays his genuine love for Sylvia.²⁰⁾

2. 恐怖にとり憑かれた妻シルヴィアとユダヤ性

ト書きでシルヴィアは、周りの者から好かれる40代半ばの快活で有能そうな温かな女性と

説明されている。その彼女が、急に両脚に麻痺を感じて歩けなくなる。専門医の診断によれば、その原因は精神的な「ヒステリー性麻痺」と呼ばれるものだと言う。彼女がそこまで追い込まれたのは、すでに前項で見たように、根本的には、ゲルバークが家庭に持ち込んだ彼のユダヤ人としての自己否定・自己矛盾的態度に主要な原因があり、それに長年苦しんだ末、生々しい写真付きのユダヤ人迫害事件の新聞報道が契機となって限界に達したのである。それでは、シルヴィアには全然、責任がないのであろうか。結論を言えば、彼女にも責められるべき責任の一端はあり、それもゲルバーク同様、彼女のユダヤ性に基づく考え方に原因があるのだ。本項の目的は、それを明らかにすることである。

劇中のシルヴィアとゲルバークの一連の会話には、ナチに対する不安と恐怖の念とともにそれが引き金となった彼女の彼に対する恨み、辛みと言いつつ諷刺や諦めが目立つ。これは、何よりも長い間、世間体を気にしながら夫や周りの親戚縁者に強いられ、また自分が自分自身に貼った「ユダヤ女」というレッテルがそうさせたのである。彼女はユダヤ社会と関わり過ぎてかえって自己喪失に陥り、それにドイツのユダヤ人迫害事件と周りの人間のそれに対する無関心が拍車をかけたのである。アボットソンはそうした状況を次のように説明する。

She has lived her life so long for others she has lost all connection with her own selfhood, but she begins by blaming *others* for this. With Gellburg dominating every scene he is in, Sylvia tends to get pushed to the side, but this marginality only reflects the way she has *allowed* her life to run.²¹⁾

当時の女性は、他人に愛想良く控えめに振舞うことが常識とされ、伝統と格式を重んじるユダヤ人社会にあってシルヴィアもこうした風潮に従わざるを得なかったと思われる。グリフィンが行ったインタビューで、ミラーも当時の状況を“Given the mores of that time and society, and her amenable personality, and the influence of her mother, she was not likely to take an independent route, so she turns against herself.”²²⁾と説明したと言う。また、ビッグズビーとのインタビューでも“In 1938 we didn’t talk about certain things. You don’t talk about sexual problems openly. You do not embarrass your husband. You do not expose personal, family matters. You’re Jewish. There is a need to keep it under the table. You do not draw attention to yourself.”²³⁾と述べている。こうした状況に加え、ゲルバークとの結婚で、彼にキャリア・ウーマンの道を断たれてから、彼女はそれを根に持ち、彼に対する復讐と断罪を図るものの、長年の忸怩たる思いがドイツでの事件を切っ掛けに一挙に爆発する。彼女のゲルバークとの会話には、こうした彼女の複雑な心理状況を表すかのように自暴自棄とも取れる言動と今更どうしようもないとする諦念があちこちに見られるのは、そのためである。

第1幕第2場で彼女が初めて登場するが、その姿は手伝いに来ている妹のハリエットが、こ

こ数日食欲もなく、顔色も冴えず、車椅子に座り、朝から晩まで新聞ばかり読んでばかり、と嘆くほどである。事実、時折何かによつたようにその情景を思い浮かべるように眼を上げる。歩けなくなった両脚について、筋肉に力が入るが上げることができず、痛みもあり、その状態を “It’s like I was just born and I ... didn’t want to come out yet. Like a deep, terrible aching ... (31) と説明する。「何だか生まれたばかりで、まだ出てきたくなかった感じ」という言葉は、ゲルバーグとの破綻した結婚への解決の糸口を探して逡巡している彼女の心の状態を表してはいないだろうか。オッテンは、この状況を“... she describes herself as suffering a form of birth trauma, reflection of the death and rebirth motif ...”²⁴⁾と分析する。

この後、ハリエットから息子が、奨学金が貰えるにもかかわらず、大学進学を断念したことを聞くと自分に大学へ行く機会があったら、ぜんぜん違う人生になっていたと暗に自分の夫との人生を悔やむかのような口ぶりである。ここで、ハリエットとの会話から、シルヴィアが新聞に興味を持つ理由が明らかとなる。“They are making old men crawl around and clean the sidewalks with toothbrushes. ... In Germany. Old men with beards! ... Remember Granpa? His eyeglasses with the bent sidepiece? One of the old men in the paper was his spitting image, he had the same exact glasses with the wire frames. I can’t get it out of my mind. On their knees on the sidewalk, two old men. And there’s fifteen or twenty people standing in a circle laughing at them scrubbing with toothbrushes. There’s three women in the picture; they’re holding their coat collars closed, so it must have been cold ... To humiliate them, to make fools of them!” (33) ドイツ人がユダヤ人の老人達に歯ブラシで歩道を磨かしている理由を「侮辱するため、笑いものにするため」と怒りを示すシルヴィアのこの言葉には、彼女の正義感が滲み出ており、この事件に関するアメリカを含む世界中の人々の無関心に対する彼女の憤りが表れている。また、シルヴィアはドイツ系のユダヤ人に異常な関心をここで示している。先にゲルバーグが彼らに無関心を示したのは好対照である。これはゲルバーグと違って彼女がドイツ系ユダヤ人であるからかもしれない。だとすると、二人の対立の芽は、すでに、この結婚以前にあったことになるだろう。

帰宅したゲルバーグが陸軍士官学校出の息子からの手紙を誇らしげに見せるにもかかわらず、すでに見たように嬉しそうな顔をしないことを咎められ、シルヴィアには怒りが込み上げるが、じっと我慢する。長年強いられたユダヤ女としての忍従とそれを強制する夫への内に秘めた反発が、ここには感じられる。麻痺についての精神科医の見立てが、ある種の恐怖からくる心理的なもの、それもナチが原因と言うゲルバーグの説明に、彼女は強く反論する。しかし、実はこれが病気の真の原因であると自分自身で自覚しているにもかかわらず、無理にそれを否定している可能性もある。シルヴィアの状態についてハイマンは、ゲルバーグに彼女と話していると、ちっとも不幸せそうに見えないと語る。さらにハリエットも、ハイマンに “I’ll tell

you something funny - to me sometimes she seems ... I was going to say happy, but it's more like ... I don't know ... like this is how she wants to be. I mean since the collapse.” (47) と言っている。病気になったことで、ドイツで虐待されているユダヤ人達と一体感を持ちえて、逆にこれまでの鬱屈した状況から一歩抜け出すことができた安堵感が、彼女の顔に出たのかもしれない。

ハイマンにやさしく接するように勧められて、ゲルバーグはシルヴィアに悪いところがあったら改めると言って近づくが、“I'm surprised you're still worried about it. ... Well it's too late, dear, it doesn't matter anymore.” (42 - 43)と素っ気ない。そして、彼女は過去の事柄を持ち出して、彼に挑戦的な態度さえ示す。自分の後悔を棚に上げる彼女の挑戦的な態度は、未だに彼に対する諦念と不信の根が異常なほど深いことを暗示する。ゲルバーグの反ユダヤの態度、キャリア・ウーマンへの道の否定が、彼への性的否定に繋がっている状況を今更ながらに見る思いがする。と同時に、彼の関係修復に対する真剣な態度とは裏腹に、ことここに至って、彼女は皮肉と嘲笑に満ちた消極的な態度しか取れないことが窺える。第3場で、ハイマンはゲルバーグと同様、シルヴィアに関しての情報をハリエットから得ている。ここで、シルヴィアがゲルバーグに強く出られない理由が、彼女から伝えられる。ハイマンの二人の離婚の危機に関する質問に、ハリエットは“*Oh God no! Why should they? He's a wonderful provider. There's no Depression for Phillip, you know. And it would kill our mother, she worships Phillip, she'd never outlive it. No-no, it's out of the question, Sylvia's not that kind of woman, although ...*”(50)と答える。この言葉は、大不況をも乗り切った優秀な会社で働き稼ぎも良いゲルバーグを尊敬する彼女のいかにもユダヤ系らしい父親・母親と世間体を気にして、自己の不満を押さへひたすら我慢を強いられたシルヴィアを見ていた妹のハリエットだからこそ言えるものであろう。

第5場では、ハイマンが乗馬服のまま、突然、シルヴィアの部屋を訪れる。彼女の麻痺がゲルバーグとの夫婦関係に原因があるとみるハイマンは、意識的に親密さを持って彼女に接近する。彼はベッドに腰をおろし、彼女の脚の覆いを取り、ナイトガウンをめくって、彼女をハットさせる。彼と話している時のシルヴィアは、実に楽しそうである。ハイマンの性的魅力と話し上手が、彼女をそうさせたのであり、事実、シルヴィアは彼と話していると希望が持てそうな気がすると言ひ、ハイマンの掌に接吻さえする。それは、ゲルバーグと途絶えた性的欲求を暗示させる。この場面のもう一つのハイライトは、ゲルバーグのユダヤ人迫害事件への他人行儀的な態度への彼女の不満の表明である。“*I almost heard that crowd laughing, and ridiculing them. But nobody really wants to talk about it. I mean Phillip never even wants to talk about being Jewish, except - you know - to joke about it the way people do ... Just to talk about it ... it's almost like there's something in me that ... it's silly ... I have no word*

for it, I don't know what I'm saying, it's like ... *She presses her chest. - something alive, like a child almost, except it's a very dark thing ... and it frightens me!*" (69)

シルヴィアは自分に恐怖感を与えているものを「まるで子供みたいな、ただとっても暗いもの」と形容するが、それはビッグズビーが“suspended animation”「仮死」と呼ぶもので、これに関して、ミラーは彼女が口に出して言いたいだけけれども、母親やラビによって非難されるのを怖れてなかなか言い出せなかったものと言う²⁶⁾。要するに、彼女の心の中にある鬱屈したトラウマのことであり、今や心を許して語り合えるハイマンを得て、それがオープンにされることになった。他方、「怖い」と言うシルヴィアの心中をオッテンは“the frightening birth of an authentic self, frightening because such a birth can occur only through suffering, at the cost of the public self”²⁶⁾と説明している。彼女が怖く感じるのは、結局、自分がいわば隠れ蓑にしてきた表向きの公的な自己から真の自己に変わる生みの苦しみというわけだ。

第6場で注目すべきは、ハイマンが妻のマーガレットにシルヴィアがただならない感覚の持ち主であることを語っていることである。“I don't know what it is! I just get the feeling sometimes that she *knows* something, something that ... It's like she's connected to some ... some wire that goes half around the world, some truth other people are blind to.” (85) この「何か」の正体を突き止めるのが、彼女の問題解決の糸口とハイマンは見る。彼女の麻痺が、もっぱら夫婦関係とそれに関連したヒステリーに原因があると見ていたハイマンは、さらにその奥底に何か潜んでいると考える。「彼女は何かを知っている」とは、ハイマン自身を含めゲルバーグ、ハリエットとその夫がその重大さをまだ、それほど認識していない台頭しつつあるホロコーストの恐ろしさのことであろう。

第2幕第2場で、ハイマンはシルヴィアから例のゲルバーグに関する悪夢について聞いた後、先夜、関係したと語るゲルバーグの話の真意を尋ねると、もう20年間も関係がなく、彼がインボであることがシルヴィアの口から語られる。そして、彼をインボに追いやった原因が自分にあることも認める。“I was so young ... a man to me was so much stronger that I couldn't imagine I could ... you know, hurt him like that. ...I was so stupid, I'm still ashamed of it ... I mentioned it to my father - who loved Phillip - and he took aside and tried to suggest a doctor. I should never have mentioned it, ... But I can't help it, I still pity him; because I know how it tortures him, it's like a snake eating into his heart. (102 - 103) 父親にゲルバーグの秘密をうっかり告げ口し、彼の面目を潰した後の彼女の後悔の念と「ユダヤ女」の気遣いがひしひしと感ぜられるであろう。自分の過ちを認めながらもゲルバーグに何もできないシルヴィアの心情は、同じく自分の責任で彼女に何もできないゲルバーグの心情と相通ずるものがある。

やがて、ドイツでの出来事に何もできない自分と重ね合わせながら、シルヴィアはドイツに理解を示しこの事件を楽観視し何も行動を起こそうとしないハイマンに向かって“*This is an emergency! What if they kill those children! Where is Roosevelt! Where is England! Somebody should do something before they murder us all!*” (107) と叫ぶ。幼い子供達が殴られ、その子供達が殺されたらどうなるのかという言葉には、二番目の子供を産む事を拒否し、それがもとでゲルバークをインポにしてしまった彼女の後悔の念が表れているとの解釈が可能であろう²⁷⁾。ローズベルトやイギリスが名指しされているが、これはナチの暴虐ぶりをただ傍観するだけで何ら行動を取らないアメリカとイギリスに対する彼女の抗議に他ならない。「何とかしなければ、私たち、みな殺しよ」とシルヴィアは叫ぶが、この「私たち」に関してミラーは、“*the first time she is taking her life into her own hands*”²⁸⁾と述べて、私的なレベルと公的なレベルが劇の中で一つになったことを指摘する。こうして、彼女の同情はユダヤ人全体へ、そして象徴的に抑圧され虐待を受けている全ての人々へと広がっていく。この後シルヴィアは、ヒステリックな衝動に駆られ、ハイマンにすがろうとベッドから一歩踏み出すが、彼が捕まえる前に、床に崩れ落ちる。彼女の意識を呼び戻そうとしている時に、ゲルバークが登場する。彼女を介抱した後、二人の関係を怪しむゲルバークに怒りの視線を投げかけて、ハイマンは出て行く。

この第2場後半は、すでに見たように全劇中のハイライトで、ゲルバークの嘘がシルヴィアにばれて両者の力関係に異変が起きる注目すべきシーンである。ハイマンのお陰で力が戻ってきたというシルヴィアに彼でなければならぬ理由を問われて、“*Because I can talk to him! I want him. An outburst. And I don't want to discuss it again!*” (110) と言い、その反抗的な態度を咎められると、“*It's a Jewish woman's tone of voice!*” (111) と述べて、ゲルバークに立ち向かう。ここには、自分を理解して何でも胸の内を話せる男性を求めていたが、伝統的なユダヤ的女性観に縛られ、夫のゆがんだユダヤ性に苦しみ、ユダヤ人迫害事件にも無関心な態度を取り、自分を狂っているとしか見ないゲルバークへのシルヴィアの剥き出しの怒りを感じ取ることができるだろう。これまでにはなかった彼女のゲルバークに対する攻撃である。これを大きく促す切っ掛けは、既述したようにゲルバークがハイマンに話した偽りの先夜の関係であり、これをシルヴィアが知ってから、二人の力関係が大きく逆転する。

この後、言わば主導権を握ったシルヴィアは、“*What I did with my life! Out of ignorance. Out of not wanting to shame you in front of other people. A whole life. Gave it away like a couple of pennies - I took better care of my shoes. Turns to him. - You want to talk to me about it now? Take me seriously, Phillip. What happened? I know it's all you ever thought about, isn't that true? What happened? Just so I'll know.*” (112) とフィリップに迫る。ユダヤ女として時代と慣習に縛られ、ひたすら夫に仕え、離婚の危機に際しても夫を尊敬する両親

の気持ちを忖度し、また世間体を気にした忍従の人生とその空しさに気付いたシルヴィアの姿が見られるであろう。と同時に、これまでの受身から一転して夫婦関係の現実素直に向き合いその実態を解明すべく、立ち上がる彼女の積極性も窺い知ることができる。また、この場面は、アボットソンも指摘するように、シルヴィア自身の責任の認識が始まる糸口にもなっている²⁹⁾。シルヴィアの受動的態度から能動的なものへの変身という観点からすると、これは『壊れたガラス』の一大ターニング・ポイントと呼んでもよいだろう。なぜならば、この場面で彼女は、何よりもこれまでの結婚生活について次のようなゲルバークの偽らざる本音を引き出しているからである。“I was ignorant, I couldn't help myself. - When you said you wanted to go back to the firm. ... When you had Jerome ... and suddenly you didn't want to keep the house anymore. ... You held it against me, having to stay home, you know you did. You've probably forgotten, but not a day passed, not a person could come into this house that you didn't keep saying how wonderful and interesting it used to be for you in business. You never forgave me, Sylvia.” (113) さらに、彼女は “What have you got against your face? A Jew can have a Jewish face.” (114) と述べて、彼の問題が彼自身のユダヤ人としてのアイデンティティー拒否にあることを指摘する。これを契機に、仕事上でつまずいたゲルバークが心臓発作で倒れる過程は、すでに見た。

第4場で、ゲルバークがいち早く退院したことについて家に集まったハリエットとマーガレットを前にシルヴィアから彼に関する極めて辛辣な言葉が語られる。“He wants to be here so we can have a talk, that's what it is. *Shakes her head.* How stupid it all is; you keep putting everything off like you're going to live a thousand years. But we're like those little flies - born in the morning, fly around for a day till it gets dark - and bye-bye. ... There's nothing I know now that I didn't know twenty years ago. I just didn't say it.” (121) 結婚してすぐ、ゲルバークのワスプ社会で懸命に生きる虚勢に気付いて幻滅したが、それ以来それをぐっと堪えて生きてきただけの後悔の人生を振り返って、シルヴィアは、この言葉を口にしてるのである。

最終の第5場後半で、二人だけになったゲルバークとシルヴィアの間にしばらく沈黙が続いた後、お互いの自意識が募る。この劇もいよいよ大詰に差し掛かり、二人の本音が語られる。謝りたいと言うゲルバークに対して、シルヴィアは現在の心境を次のように述べる。“I'm not blaming you, Philip. The years I wasted I know I threw away myself. I think I always knew I was doing it but I couldn't stop it. ... For some reason I keep thinking of how I used to be; remember my parents' house, how full of love it always was? Nobody was ever afraid of anything. But with us, Phillip, wherever I looked there was something to be suspicious about, somebody who was going to take advantage or God knows what. I've been tip-toeing

around my life for thirty years and I'm not going to pretend - I hate it all now. Everything I did is stupid and ridiculous. I can't find myself in my life. Or in this now, this thing that can't even walk. I'm not this thing. And it has me. It has me and will never let me go.” (136-37) ここには、愛のない、びくびくとした疑いばかりの結婚生活に飽き飽きして、一刻も早く本来の自分に戻りたいと願うシルヴィアの心境が吐露されている。この言葉は、最終的にゲルバークのこれまでの自分の反ユダヤの生き方の間違いを改めて気付かせ、意識を失って仰向きに倒れる前の“God almighty, Sylvia forgive me!” (138) という台詞に込められた彼の自己覚醒を成就させる。二人が図らずも病気にかかり、同病相憐れむ状態でお互いのコミュニケーションが持てる希望の光が見えたという認識も束の間、ゲルバークは倒れる。“Wait, wait ... Phillip, Phillip!” (138) のシルヴィアの声が空しく響くが、自己の両脚が立ったことに気付いた彼女の人生は、彼の命の代償で蘇ったかに見える。

翻って考えてみると、シルヴィアはゲルバークとは正反対で、他人との関係が比較的緊密な社交家でもある。しかしながら、長い間、まわりの他人や身内との関係に神経を遣う、いわゆる「良きユダヤ女」、「良きユダヤ人妻」であり過ぎたために、かえって彼女自身の自己を喪失してしまった。結婚後も続けたかったキャリア・ウーマンの道がゲルバークによって閉ざされた結果、自己否定の道を歩まざるを得ない。彼女は、私は母のため、ジェロームのため、そして自分以外のみんなのため、と述懐するが、これはこうしたユダヤ女性として忍従を強いられた彼女の積年の思いが爆発したことを物語っているだろう。どうにか乗り切ってはきたものの、彼女のユダヤ女性特有のその控えめな態度が裏目となり、ついに限界が来る。ヨーロッパにおけるナチのユダヤ人迫害のニュースに対し異常に反応するのは、その反動が主な原因である。と同時に、彼女がこうして抵抗に立ち上がるのは、このドイツでのユダヤ人襲撃事件に周囲のほとんどの者が無関心を装い何もしないという恐怖感に駆られ、同時に自分の無力を痛感したからに他ならない。これが皮肉にも、ゲルバークを動かし彼女の彼との関係を見直す重要な契機となった。ヨーロッパやアメリカの多くのユダヤ人同様、何もせず、ただ傍観することもできたはずであったが、彼女は敢えてこれに立ち向かった。そして、彼女のこの行動が他人、とくに夫ゲルバークに対して無言の圧力となったのは、言うまでもない。この彼女の“catalyst”「触媒」的役割についてミラーは、デレクターや俳優の意見からヒントを得たことがビッグズビーによって紹介されている³⁰⁾。

3. 科学的理想主義者ハイマンとユダヤ人像

妻の病気を契機に現実を知り苦悩するゲルバークに比べて、ハリー・ハイマンは活力に満ち、当時のユダヤ人にはめずらしく乗馬を趣味とし、ユダヤ人女性ではなくワズプを妻としている。

この彼の言わば“secular Jew”としての立場が、ゲルバークやシルヴィアに第三者的なアドバイスを与えることできたと考えるのも、あながち間違いではないかも知れない。しかし、彼の医者としての患者（シルヴィア）への対応や妻（マーガレット）に対する夫としての振る舞いには、疑問の余地が残るのも事実である。たとえば、ゲルバークが自分が疑われていることに腹を立てて飛び出していった後、妻マーガレットはハイマンに、“Are you in trouble? ... You don't realize how transparent you are. You're a pane of glass, Harry.” (83-4) と言って、彼の明らかな女癖を暗示する。これを彼が自分の周りに張っているガラスがマーガレットによって壊されたと解釈すれば、この劇のタイトルのメタファとなっていることに気付くだろう³¹⁾。何か自分に都合が悪い事態に遭遇すると、たとえば患者への色目を妻から非難されたり、ナチの迫害やドイツ人に関してシルヴィアから意見を求められると、うまくはぐらかして自己弁護を図るちゃっかり者でもある³²⁾。だが、物事に距離を置き突き放して見るという意味では要領の良い人物でもある。事実、この性格がシルヴィアとのコミュニケーションに非常に役立っている。

ハイマンは、人生を大いに楽しむ医者であり、またロマンチストでもある。両脚麻痺にかかったシルヴィアを診断した関係からゲルバーク夫婦と関わりを持つようになる。科学的理想主義者らしくシルヴィアの病気の原因を突き止め、一時ゲルバークやシルヴィアに誤解されはするものの、良き相談相手となって彼らの長年の夫婦問題を和解へと導く。ゲルバーク夫婦の問題が、究極的にはユダヤ人のアイデンティティーを巡るものであるもので、彼のユダヤ人としてのアドバイスと人生観はユダヤ系アメリカ人の一ロール・モデルと呼んでもいいだろう。と同時に、大団円における彼のゲルバークに対するユダヤ人の生き方に関する考え方はミラーのそれを代弁している。以下、ゲルバーク夫婦と妻マーガレットとの関わりから見えてくる彼のユダヤ性を考察する。

ユダヤ系アメリカ人として、当然、ハイマンはドイツの事件を耳にしており、シルヴィアの麻痺とこの事件との関係を調べる中、彼女の病気の原因が肉体的なものでなく、心理的なもので、直接には夫との夫婦関係にあると見る。やがて、その夫婦関係を阻害した原因であるユダヤ性を巡る二人の見解の相違を突き止める。最終的に彼らの結婚生活の破綻における両者それぞれの責任の自覚を促がしたという意味で、ハイマンは、彼らの重要な調停役であったと言える。マーガレットの誤解を受けながらも、すでに見たように、彼はシルヴィアが他人には見えない真実のようなものと結ばれていると言って、彼女の心の奥底にある問題の核心を突き止める決意を固める。もし、一旦諦めた彼らのカウンセリングを、この時点で続行しなかったら、二人の歩みよりは不可能であったであろう。こう考えると、彼の果たした役割の大きさが理解できる。夫婦関係の問題の根を、他ならぬゲルバークのユダヤ性とシルヴィアのユダヤ性を巡る見解の相違に求めた彼の功績は、彼がユダヤ人であったことと無縁ではない。

ハイマンはシルヴィアの中に眠っていた性の目覚めを促がしたが、それと同時に、彼女のドイツに対する恐怖心を取り除こうとした。彼はまず、シルヴィアのナチに関する質問にナチは、長くは続かないと言って、シルヴィアの抱く懸念の払拭を図る。第2幕第2場でも、“This will pass, Sylvia! German music and literature is some of the greatest in the world; it's impossible for those people to suddenly change into thugs like this. So you ought to have more confidence, you see? - I mean in general, in life, in people.” (105) と言って、ユダヤ人迫害事件で精神的打撃を受けた彼女のドイツに対する恐怖心を取り除くことに努める。ゲルバークに対して彼は、ユダヤ人としての自己否定がシルヴィアに恐怖感を与えていると述べて、彼のユダヤ人としての生き方を批判する。

目立つ存在、差別される存在、他と違う存在と見られるユダヤ人から離れて生きようとしてきたゲルバークの生き方、すなわち、なぜわれわれは違わなければならないのかと絶えず意識せざるを得ない彼のユダヤ人としての痛みや叫びを伴う生き方は、自分の神経を無駄にすり減らす単なる徒勞に過ぎないと説くのである。“I'm talking about all this grinding and screaming that's going on inside you - you've wearing yourself out for nothing, Phillip, absolutely nothing! - I'll tell you a secret - I have all kinds coming into my office, and there's not one of them who one way or another is not persecuted. Yes. *Everybody's* persecuted. The poor by the rich, the rich by the poor, the black by the white, the white by the black, the men by the women, the women by the men, the Catholics by the Protestants, the Protestants by the Catholics - and of course all of them by the Jews. *Everybody's* persecuted - sometimes I wonder, maybe that's what holds this country together! And what's really amazing is that you can't find anybody who's persecuting anybody else.” (134) 人間は、本質的に迫害されると同時に迫害する存在であるとするこれまでの作品にもたびたび見られたミラーの人間観が、ここに現れている。

また、ヒットラーの脅威を懸念するゲルバークに対して、“Hitler is the perfect example of the persecuted man! I've heard him - he kvetches like an elephant was standing on his pecker! They've turned that whole beautiful country into one gigantic kvetch!” (134) と語って、その本質を暴いてみせる。解決は何かと迫るゲルバークに、自分から逃げずに鏡の中の自分を見ることと、シルヴィアを許すこと、そして最終的に自分とユダヤ人を許すことだと述べ、“And while you're at it, you can throw in the goyim. Best thing for the heart you know.” (135) と諭すのである。

結語

先にゲルバーグとシルヴィアの生き方に見られる自己否定の側面に関して考察を進めたが、他の重要なテーマとして、「怖れ」がある。そもそも、ゲルバーグは、なぜシルヴィアが自分を怖がるのか理解できない。ゲルバーグの心中にある痛みや叫び、それに彼が彼自身を嫌っていることが、シルヴィアを怖がらせているとハイマンは指摘する。これこそ彼のあいまいなユダヤ人としてのアイデンティティーのことであり、これを知った後、逆にゲルバーグが彼女を怖がるようになる。彼女が自分を怖がっている理由がはっきりわかったからである。そして、現実と直面することで自己の弱点に気付いたからでもあろう。彼が病気になることで、共通の状況が生み出され、相手に同情を寄せることが可能になったのもその原因の一つと考えられる。一般的に、怖れの感情は、自分に隠し事があり、自己欺瞞に陥った時に持つものである。ワズプ主導の会社では、ゲルバーグは自己欺瞞を犯してでも、自己に不利なあらゆる事実を目をつぶらなければならないと考えた。シルヴィアは、この事実を知っているがため敢えて彼の生き方を強く否定できない。お互い心の底から憎み合っていないのは、そのためである。この夫婦には、このようにお互いに共通する部分が多く、ハイマンがゲルバーグに語る鏡の話を採用するならば、二人の関係は、鏡を重ね合わせた鏡像関係にあると言えるだろう。また、この劇は、先述したような夫婦の相手に対する「怖れ」を克服する過程を描いた戯曲とも言えよう。

「怖れ」とともに他の重要なテーマとして、相手に対する「非難」がこの劇には顕著である。ラーはこの点に特に注目して“The cycle of blame, with its litany of long-harbored recrimination, spews out of them (Gellburg and Sylvia) and pushes them farther into their entrenched positions. They’re both right, and they’re both wrong. What’s true is the psychological dynamic, in which blame becomes a way of not dealing with unacceptable feelings.”³³⁾と述べる。この解釈は非常に説得力があるだろう。というのは、ゲルバーグは自分を性的不能者にし、もはや男であって欲しくないと思わせた張本人としてシルヴィアを非難し、逆にシルヴィアは自分の職業婦人としてのキャリアを妨害し、家庭においても暴君的であったと言ってゲルバーグを非難しているからである。実は、これこそが完全に夫婦のコミュニケーションを途絶えさせた原因であった。問題をやっかいにしたのは、これが沈黙の形で発展し、限界を迎えてしまったことである。

ここで『壊れたガラス』の人物描写について述べておきたい。『壊れたガラス』の登場人物は、ほとんどがユダヤ人であるが、ミラーは彼等を普遍的な人物として描くことに成功している。なぜならば、ゲルバーグのような人物は、ユダヤ人として独自の問題を抱えているのは確かだが、彼の抱える問題はごく普通の人間が遭遇する問題でもあるからだ。とくに大小様々なエスニック・グループによって構成されるアメリカ社会において、ゲルバーグが陥ったジレンマは、

大なり小なり誰もが必然的に抱える問題である。アボットソンは、アメリカのユダヤ人としてゲルバーグは二重の意味で自己のアイデンティティーをあいまいなものとしたと見ている。

He is doubly caught: first between his own Judaism and the popular idea of America as a melting pot and second, between his own rejection of his Jewishness and the anti-Semitism he sees around him. Anti-Semitism is not something he has created; it lies all around him. His response to it is to try to see himself as unique, insisting on his unusual name and Finnish origins. However, such a response is inadequate, for it is done to avoid becoming part of communities he views with ambivalence; it is an empty identity he is creating.³⁴⁾

総じて、アメリカ人は、自己の属する民族集団とそれを超えたいいわゆる坩堝社会に生きる。ゲルバーグは、この両者間のバランスを欠き極めてあいまいな態度を取った。次に、彼はこれまで見てきたように、反ユダヤ主義のはびこる社会で生き延びるために自己のユダヤ性を恥ずべきものとして否定した。こうしてユダヤ性の拒否と現として存在する反ユダヤ主義の間で苦しむことになった。ここで得た彼のアイデンティティーは所詮、空虚なものに過ぎなかったからである。したがって、ゲルバーグに求められるのは、自分のユダヤ人としてのアイデンティティーを尊重し、と同時にアメリカ市民として自己を確立し、両者間のバランスを保つことである。こうして、彼は個人と社会を統合する積極的な自画像を描くことができるのだ。個人的自我と社会的自我を包摂するデュアルなアイデンティティーこそが、多民族国家アメリカにおける人々、とりわけマイノリティー民族集団の人々が求めるべき目標なのである。ゲルバーグが、これに早くから気付いていれば、歪んだユダヤ性に基づく自己否定と自己矛盾に陥ることなく、シルヴィアとの偽りの結婚生活を回避できた可能性があったであろう。だが、時代がそれを許さなかったのだ。

ハイマンに「自分の中のユダヤ人をゆるせば、異教徒とも仲良くできる」という言葉に諭されて、ゲルバーグは自分の中の「他人」を理解し始める。これは『ヴィッシーでの出来事』のルデックがフォン・ベルクに言った次の言葉のエコーとなっている。

Part of knowing who we are is knowing we are not someone else. And Jew is only the name we give to that stranger, that agony we cannot feel, that death we look at like a cold abstraction. Each man has his Jew; it is the other. And the Jews have their Jews. And now, now above all, you must see that you have yours - the man whose death leaves you relieved that you are not him, despite your decency.³⁵⁾

ユダヤ人であるルダックが非ユダヤ人のフォン・ベルクに言ったこの言葉が、『壊れたガラス』では、文字通り、ユダヤ人がユダヤ人に発した言葉となって帰ってきたのである。ここに、まずハイマンを通じてゲルバーグが得たミラーのメッセージが読み取れる。

それでは、シルヴィアに関しては、どうであろうか。彼女の麻痺には、これまでの考察で明らかのように、個人的なレベルでは、夫による自分への行為の犠牲者の姿、それに対して何もしない、あるいはできない自分の傍観者としての姿、そして夫への加害者の姿などが象徴されているだろうが、社会的なレベルでは、ヒトラーのナチとそのユダヤ人迫害事件に対して何もできないことへの苛立ちを表している。実際、シルヴィアは50年前に実在した女性がモデルとなったもので、ミラーは、その女性のイメージを“the image of that woman sitting there unable to move, and nobody knowing why, and it seemed an exact image of the paralysis we all showed then in the face of Hitler”³⁶⁾と説明している。と同時に、それはまた夫ゲルバーグを含む周りの人間のこの事件への無関心への抵抗をも象徴している。オッテンは、それを“Paralysis symbolizes the moral impotency that arrests all the characters in the play.”³⁷⁾と指摘する。さらに、メイヤーは「置換された沈黙のイメージ」“the displaced image of silence”と呼ぶ。つまり、それはクリスタルナハトを前にしてゲルバーグ、ハリエット、ハイマンそしてアメリカ政府が何も抗議の声を挙げない状況を指し、同時にゲルバーグ夫婦のお互いに対する沈黙の裏切りを意味するといっているのである³⁸⁾。これを拡大解釈して、ゲルバーグ夫婦の長年にわたる真のコミュニケーションの断絶の象徴と見ることもできるだろう。

彼女は、最終的に両脚で立ち上がった。これはこれまでのゲルバーグとの人生を振り返り、全てを彼の責任にするのではなく、自己の責任を自覚し、文字通り、自分の脚で立つ独立した人間のイメージを意味する。この自己責任の意識は、ホロコーストを人類の一大罪として忘れてはならないとする人間の責任の観念と通ずるものなのだ。「想像力の欠如は、我々の死を招く」“a failure to imagine will make us die.”³⁹⁾とミラーは述べるが、はるか遠くで起こった出来事を、自分とは関係ないものとして無視することは実に簡単だ。しかし、同じことが遅かれ早かれ自分達の身にも降りかかるかもしれない。人類がサバイバルするためには、誰もが同じ空間に生きている人間としての責任を自覚し、人類共存の道を追求しなければならない。このミラーのメッセージが、シルヴィアの苦悩を通じて感じられるだろう。

ミラーはゲルバーグとシルヴィアの夫婦関係を描くに当たって、ゲルバーグの性的インポテンシーを意図的にこの作品に持ち込んだ。シルヴィアの両脚麻痺の原因が、彼のインポから来る性的フラストレーションにあるというわけだ。そして、その根本には本来のユダヤ人としてのアイデンティティーを拒否して消極的に生きるゲルバーグのインポテントな人生态度が暗示されている。さらに、これはドイツのユダヤ迫害に抗議的行動を取らず他人行儀的なハイマン、ハリエットとその夫たちの無関心な態度（inaction）をも意味している。そして、最後に、こ

れはミラーのこの作品における究極のメッセージであるホロコーストは単にユダヤ人だけではなく人類全体の問題であって、それに無関心をかこって何ら行動を起こさない多くの人々の態度は、アボットソンが、“denial, resignation, or ignorance ... is tantamount to complicity.”⁴⁰⁾と述べるように文字通り、インポテンシーそのもので、それは迫害を行った者との共犯さえ意味するのである。そもそも、ミラーがこの作品を書くことになった直接の動機は、民族浄化“ethnic cleansing”が主たる原因で起こったルワンダやボスニア紛争が理由であったと述べている⁴¹⁾。多くの人間は、これらの出来事を自分達とは無関係だと思って生きている。しかし、はるか遠くで起こっていることでも、いつか自分たちの身に降りかかるかもしれないと感じ、この地球上に生きる人間としてインポテンシーを越えた社会的連帯責任を感じることの必要性を『壊れたガラス』で、ミラーは問題提起しているのだ。

注

- 1) Alice Griffin. *Understanding Arthur Miller*. (Columbia, South Carolina: University of South Carolina Press, 1996). 186.
- 2) 柘田良一、「Arthur Miller: *Focus* ユダヤ人、それは自己に内在する他者である」、『村上至孝教授退官記念論文集』、英宝社、昭和49年、419。
- 3) David Richards. “A Paralysis Points to Spiritual and Social Ills.” *New York Times*, April 25, 1994 in *New York Theatre Critics' Reviews*, 1994, Vol. LV, No.6. 129.
- 4) Susan C. W. Abbotson. “Issues of Identity in *Broken Glass*: A Humanist Response to a Postmodern World,” *Journal of American Drama and Theatre*, 11 (Winter 1999). 75, 77.
- 5) Richards. 129.
- 6) William A. Henry III. “Sylvia Suffers,” *Time*, May 9, 1994 in *New York Theatre Critics' Reviews*. 130.
- 7) David Stearns. “A Glistening Broken Glass,” *USA Today*, April 25, 1994 in *New York Theatre Critics' Reviews*. 130.
- 8) Murray Biggs. “The American Jewishness of Arthur Miller,” *A Companion to Twentieth-Century American Drama*, ed. by David Krasner (New York: Blackwell Publishing Ltd., 2005). 213.
- 9) Arthur Miller. *Broken Glass* (New York & London: Penguin Books, 1995). 11-12. 以下、作品からの引用は、ページ数のみで示す。
- 10) このハイマンの見解は、当時流行したフロイトの夢の分析と汎性欲説に基づく精神医学を彷彿とさせて興味深い。
- 11) Terry Otten. *The Temptation of Innocence in the Dramas of Arthur Miller* (Columbia and London: Univ. of Missouri Press, 2002). 231.
- 12) ケイスには、口語で「変わり者」、「扱いにくい奴」、「馬鹿」などの意味がある。
- 13) Kinereth Meyer. ““A Jew Can Have a Jewish Face”: Arthur Miller, Autography, and the Holocaust.” *Prooftexts* 18, The Johns Hopkins Univ. Press, 1998. 254.

『壊れたガラス』におけるユダヤ系アメリカ人のアイデンティティ（及川）

- 14) Otten, 231.
- 15) Biggs. 215 - 16.
- 16) Abbotson. *Journal of American Drama and Theatre*. 74.
- 17) Susan C. W. Abbotson. *Student Companion to Arthur Miller* (Westport & London: Greenwood Press, 2000). 106.
- 18) 『アメリカのユダヤ人 二重人格者の集団』, ジェイムズ・ヤフェ著, 西尾忠久訳, 日本経済新聞社, 昭和47年, 26。
- 19) Abbotson. *Student Companion to Arthur Miller*. 106.
- 20) Otten, 231.
- 21) Abbotson, *Journal of American Drama and Theatre* .77.
- 22) Griffin. 186.
- 23) Christopher Bigsby. *Arthur Miller: A Critical Study* (Cambridge: Cambridge Univ. Press, 2005). 393.
- 24) Otten, 235.
- 25) Bigsby, 398-99.
- 26) Otten, 235.
- 27) Otten, 233.
- 28) Griffin, 186.
- 29) *Student Companion to Arthur Miller*. 107.
- 30) Bigsby, 396.
- 31) Biggs. 213.
- 32) *Student Companion to Arthur Miller*. 108.
- 33) John Lahr. "Dead Souls." *The New Yorker*, May 9, 1994 in *New York Theatre Critics' Reviews* 1994, Vol. LV, No. 6. 125.
- 34) Abbotson, *Journal of American Drama and Theatre*. 75.
- 35) Arthur Miller, *Incident at Vichy*, (New York: Viking, 1966), 66.
- 36) *Understanding Arthur Miller*, 182.
- 37) Otten, 231.
- 38) Mayer. *Prooftexts*. 254.
- 39) Arthur Miller, *Timebends: A Life* (London: Penguin Books, 1987). 167.
- 40) Abbotson, *Journal of American Drama and Theatre*. 70.
- 41) Griffin, 182.

（及川正博，立命館大学国際関係学部教授）

The Jewish American Identity in *Broken Glass*

Like *The Last Yankee*, *Broken Glass* focuses on the failed relationship of a middle-aged Jewish American couple in their fifties, joined by race and marriage, yet divided by both amid the anti-Semitism in the 1930s.

The purpose of this paper is to study the theme of the Jewish American identity through their failed relationship suggested by Sylvia's, the wife's, paralysis of the leg. It is suggested that the cause of Sylvia's paralysis has something to do not only with her own Cassandra-like obsession with the Nazi threat in Germany, but also her traditional way of thinking as a Jewish woman bound by the mores of that time and society as well as her husband's, Gellburg's, self-loathing of his Jewishness.

The theme of the Jewish American identity is sought through the three main characters: Gellburg, Sylvia and a secular Jew, Dr. Hyman. The first section examines Gellburg, who suppresses his Jewishness, simply because he considers it an obstacle to his career among the Wasps, but, gradually, comes to realize that it has been bothering Sylvia, and led to his own eventual downfall. The second section studies Sylvia, whose "hysterical paralysis" is diagnosed as an effect of the above-mentioned divisions by Hyman. The third section takes a close look at the role Hyman plays in dealing with the couple's problems as a so-called therapist.

Finally, the paper concludes that Sylvia's paralysis symbolizes the moral impotency that arrests all human beings including the characters in the play, which is tantamount to complicity, reflecting Miller's message that all human beings on earth should assume social responsibility and help prevent all wars and cure all social ills, such as anti-Semitism, which plague the world.

(OIKAWA, Masahiro, Professor, College of International Relations, Ritsumeikan University)